

# 近代の墨侯における市街地の構造変容

岐阜大学 学生会員 ○西慎太郎  
岐阜大学 正会員 出村嘉史 高木朗義 倉内文孝

## 1. はじめに

大垣市安八郡墨侯町は長良川の右岸に位置しており、東には揖斐川、北側には支派川である犀川がある。墨侯町はこれらの河川に囲まれた輪中であり、鎌倉時代や江戸時代には鎌倉街道や美濃路の拠点の一つとして東西交通の重要な町であった。そのため、宿場町として発展してきた歴史があり、織田信長が美濃攻略の拠点としていたことも有名である。墨侯の住民は町の歴史を大事にしており、町の歴史に誇りを持っている。一方で、宿場町であった手掛かりは失われつつあり、一般的な郊外住宅地となっている。

墨侯は昭和初期の河川改修によって大規模な移転が行われ町の構造は大きく変化した。この時代の構造変化は現在の町の骨格となっている。本研究では文献・計画書・計画図等を用いて事実検証を行い町の構造変化を読み解くことで、町づくりにおける問題・課題を明らかにする。これにより墨侯の新たな基礎情報となることを目的としている。

本研究では以下の史料を取り扱う。町史・工事史・事件史等から当時の工事までの流れや出来事が記されており、時代の流れや工事や出来事の大まかな概要が把握できる。工事計画図・地図・絵図からは、場所の把握、地形や町の変化を読み取ることができる。また、県や町が出した申請書や報告書等については、当時の重要な史料として位置付けている。

## 2. 昭和初期の墨侯におけるインフラ整備

明治20年に木曾三川の抜本的な治水対策として三川分流が謳われ、同年に最初の工事として木曾川下流改修工事が着工された。続いて、大正10年には木曾川上流改修工事が着工され、同年に内水問題を改善させるために支派川を集め、速やかに内水の本川に排除する支派川改修工事が謳われた。支派川改修工事を実現させるためには、町の中を掘削し、河川を新設する必要があった。これに反対した関係町村によって騒擾事件が起こり、軍隊が出動するほどの暴動になった。その後、計画案が変更されることになり改修による影響を受ける町が縮小したため、改修工事が容認され改修工事が着工された。<sup>1) 2)</sup>

### (1) 犀川改修工事

改修工事以前では洪水の際に長良川からの逆流によって排水機能が失われ、本巣郡諸村が甚大な被害を受けてきた。この治水対策として①各支派川の流路修正②河道を掘削して流積の拡大③堤防の強化④本川との合流地点の樋管の建築⑤水路を新設し本川との合流を下流で行うこと。これらが犀川改修工事

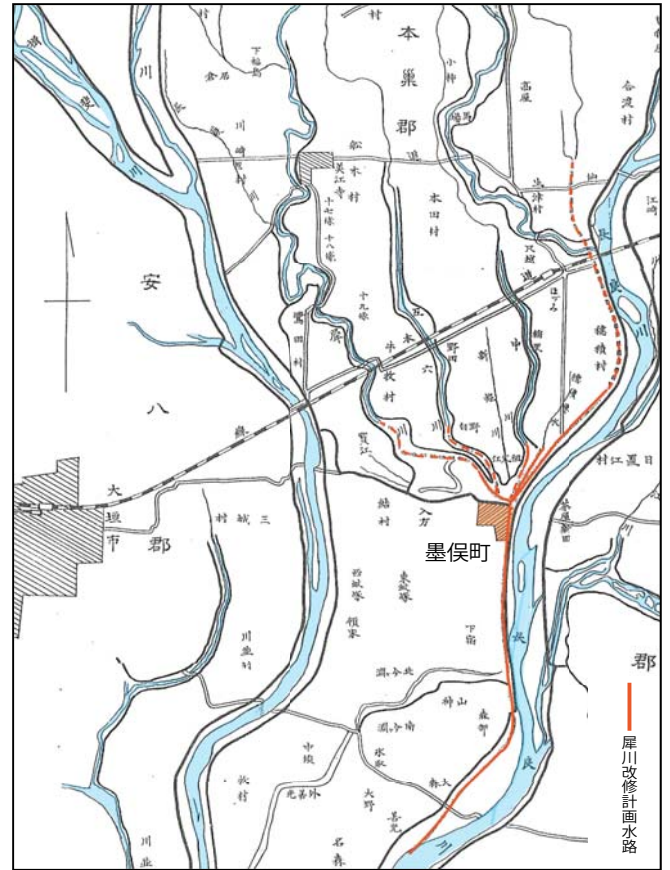


図-1 犀川改修計画平面図

の計画であった(図-1)。<sup>3)</sup> また、⑤の内水を速やかに排除させるため、支派川を一つにまとめ墨侯を始めとする安八郡諸村に水路を新設し、長良川下流部に合流させる計画段階で、下流部の墨侯を始めとする七か町村によって反対運動が起こった。

### (2) 犀川騒擾事件

内水問題を解消したい本巣郡諸村と、水路を町中に新設することによって水害の危険が増加し移転を強いられる安八郡諸村とで対立した。双方の協議により図-2の①案を②案へ、②案を③案へと若干の計画修正はあったが、和解することはできなかった。しかし、内務省直轄の工事であったため、同意が得られぬまま改修工事が進められたため、警察官と住民とが衝突した、遂には軍隊が出動することになり、暴動は鎮圧された。結果的に①～③案の安八郡の中央を貫通させる案から、④案の長良川沿いに水路を新設する案に変更されたことにより収用する用地が最小限に押さえられ、工事の直接的な被害を受ける地域が縮小された。また、幹線道路敷設工事が計画されていた矢先であったため、道路敷設と引き換えに改修工事を容認するという意見も見られた。<sup>4)</sup>

### (3) 岐垣国道改築工事

昭和初期，岐阜市と大垣市を結ぶ国道は幅員が狭く屈曲も多かったため見通しが悪かった。また，東海道本線と平面交差になっており，岐阜市～大垣市間にある長良掛斐の二大川に架かっている橋梁も老朽化しているのが現状であった。また，当時は第一次世界大戦後の経済界の不況によって，失業者が増加しており，昭和5年現在の県下における失業者は5121人であり，そのうち救済を必要とする失業者は3200人余であった。これらの救済事業として一般失業者でも容易に就ける道路改築事業を興し，岐垣国道改修工事と長良大橋工事とが岐垣国道改築工事として施工された(図-3)。<sup>5)</sup>

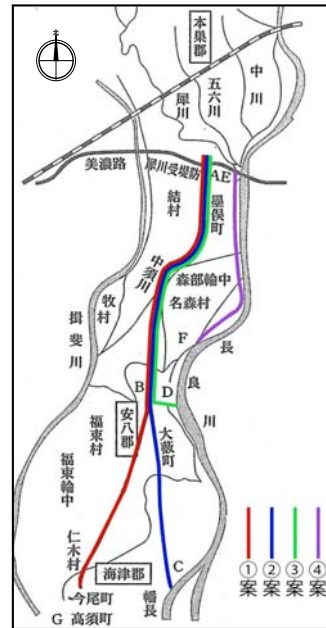


図-2 犀川切落案

### 3. 犀川改修後における墨侯の変容

犀川改修工事による移転が行われる以前の墨侯は川町(川端町)と呼ばれていたところがあり，町役場をはじめとする銀行・郵便局・派出所・神社・料亭・商店・住宅・渡船場が立ち並ぶ，墨侯の中心市街地であった(図-4)。<sup>6) 7)</sup>しかし，犀川改修工事による移転は昭和6年に開始され，川町は姿を消すこととなった。これにより役場・派出所・家屋は新たに生まれた栄町に移転を行い，郵便局は本町へ移転を行った。また，渡船場は長良大橋が架設されることによって，河川を渡る手段が船運から陸運に移り変わり，廃止することとなった(図-5)。<sup>8)</sup>

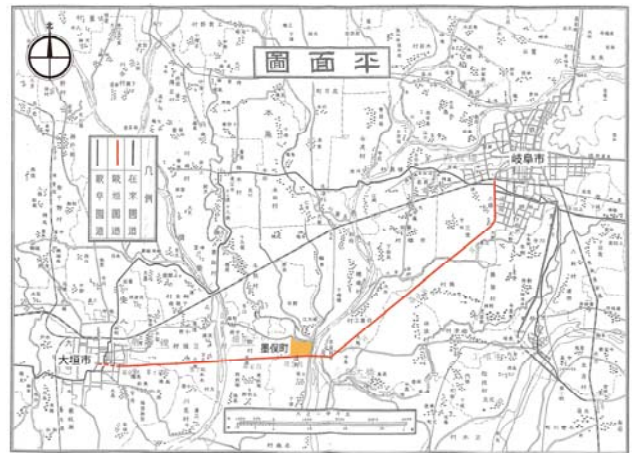


図-3 岐垣国道改築工事平面図

### 4. 終わりに

犀川改修工事の計画が変更されたことにより収用地が最小限に押さえられた。これによって反対住民の数が減少し，墨侯を押さえることで工事が進む状況となった。犀川改修を容認する条件として岐垣国道の敷設を掲げることとなった。また，中心市街地であった川町は犀川改修による移転で姿を消すことになったが，岐垣国道敷設により新たに栄町が造られ，墨侯の新たな中心市街地となったなどの移転の様子が明らかとなった。町の中核であった川町が栄町へ移転を行った際に全く新しい区画として町並が形成されたことが把握されるが，この構造の根拠を正しく理解することが，今後の町づくりの指針を考える上で重要になるだろう。



図-4 犀川改修前

### 参考文献

- 1) 建設省中部地方建設局「木曾三川治水百年のあゆみ」H. 7. 3
- 2) 墨侯町教育委員会「すのまたのあゆみ」S. 57. 11
- 3) 岐阜県「犀川改修計画説明概要」S. 5. 1
- 4) 犀川騒擾事件史編纂委員会「犀川騒擾事件史」S46. 8. 8
- 5) 岐阜県「岐垣国道工事概要」S. 15. 4
- 6) 墨侯町「明日のすのまた」H. 6
- 7) 安八郡墨侯町「役場位置変更官報及公報公告ノ件」S. 10. 2
- 8) 日本土地宝典刊行社「安八町土地宝典」1977



図-5 犀川改修後